「窪田空穂展」について

窪田空穂展実行委員会

窪田空穂は明治十年に生まれ、昭和四十二年九十一才で没している。今年は恰度没後二十年の節目に当るので、これを記念して、図書館では六月八日～十二日の六日間「没後二十年記念窪田空穂展」を大隈記念室に於いて開催した。

当館では昭和六十年春に「井伏鱒二展」を開催している。これは井伏氏が第一回の「早稲田大学学芸功労者賞」を受賞されたのを記念して開いたものであるが、これを契機に、早稲田系作家群の紹介展示を行ってゆくことを企画し、現在まで、小沼丹、三浦哲郎、土岐善麿、北原白秋、若山牧水、服部嘉香、丹羽文雄の各氏の展示を、テーマを選んで行ってきている。今回の「窪田空穂展」もその趣旨にそったものである。

また、図書館では現在「稲門ライブラリー」と名付けて、校友文学者の著作の収集に着手しているところであるが、その計画の中で改めて空穂の著作を見直すと、その収集も脱落があり、整理の上でも再考すべき点があった。そこで、先に「柳田文庫」「本間文庫」「土岐文庫」などを形成したのを継承し「空穂文庫」として関係資料の収集・整理をはかるべきではないかと考えられていた。折よく、社会科学部の武川忠一教授より「恩師空穂の全資料を、与うかぎり母校早稲田に蒐めたい。ついては、窪田家所蔵の資料を図書館に入れて戴けるよう仲介の労をとろうと思うが」との御申出を受けた。それをうけて早速、館長が御子息である名誉教授窪田章一郎先生宅に参上し、「空穂文庫」の構想をお伝えしたところ、協力を惜しまぬ旨お約束下さり、更に空穂全著作をはじめ、関係資料を出来る限り

寄贈しようとのお申出を戴いた。

この度の「空穂展」にはその寄贈本の殆んどが展示され、会場を飾ることとなった。

開催まで

空穂は松本に生まれ、明治二十八年、松本中学を卒業するとすぐ、文学を志し、坪内逍遥を慕って上京、東京専門学校（早稲田大学）に入学、途中一度退学をしたが三十三年に文学科に再入学、三十七年に卒業している。この十年の間に「文庫」「明星」に多くの作品を投稿、詩人・歌人として活動し、三十五年には同人雑誌「山比古」を創刊。卒業の翌年には第一詩歌集「まひる野」を刊行している。その後、四十才台には自然主義思汐を浴びながら、「歌」よりも「小説」に打ち込み、「早稲田文学」誌上で〝新進作家〟として名をあげられる一時期をもつ。その頃の文学者達との交流は、さながら近代文学史の流れを物語るものがあり、随筆・評論などの中にもその間のことを多く書き残している。その後国木田独歩の「独歩社」に入るなど、ジャーナリストの道を歩んだ時期もあったが、大正九年、文学部に国文学科が創設されたとき、逍遥に招かれて専任教員となり、それより定年によって退職するまで、三十年間を早稲田の教壇に立った。三大評釈といわれる万葉・古今・新古今の古典歌集の全評釈は、教室での講義がもととなって遺されている。

このように、空穂の活動の分野は非常に多面的で、遺された全集は二十九巻に及び、大山脈となってわれわれを圧倒する。したがって、展示の方法も、単に編年とはせず、活動分野別として、おおむね十のグループにわけ、それによって、空穂九十一年の生涯の足跡をたどれる展観となるよう心掛けた。即ち、「揺籃期」「空穂周辺の雑誌」「詩から小説へ」「歌人として」「研究・評論」「評釈・現代語訳」「随筆・批評」「紀行文」「ジャーナリスト」「教員として」

である。これはまた、おのずから年代順ともいえるものでもあった。

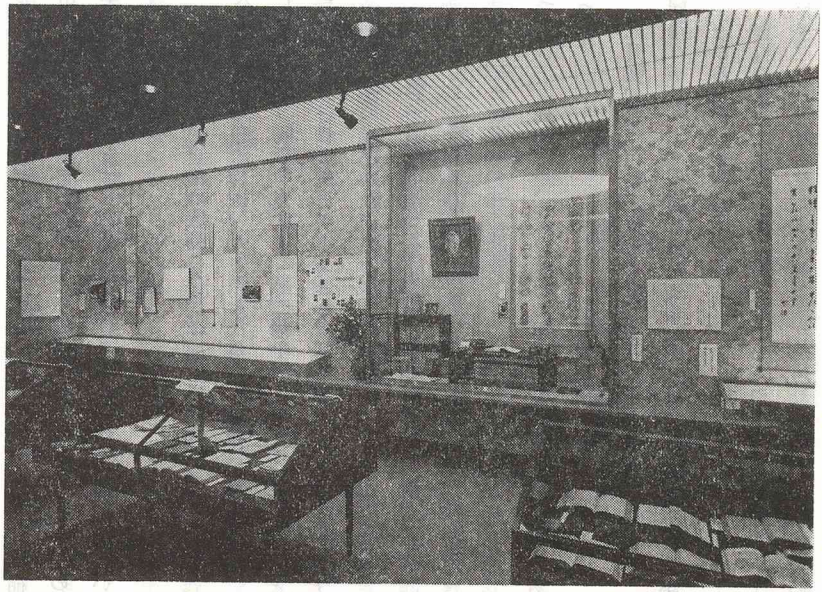
五月初旬までに展示資料の確定をし目録編集へとすすんだ。同時にポスター、葉書等の作成もすすめられ、表紙には歌集「まひる野」の表紙図柄を用いた。

資料の蒐集については図書館にあるものは早くからまとめておき、一方、窪田家には委員がいれかわりお邪魔して、資料の

搬出に当たった。武川先生・来嶋靖生氏にも幾度となくご足労願い、助言の他資料蒐集にもご尽力戴いた。また、その他の個所からも委員が分担して拝借に参上し六月五日迄にはほぼ現物が揃えられた。

会場にて

初日早々窪田章一郎先生御夫妻をお招きし、奥島館長の案内でまず会場への第一歩を印して戴いた。先生にとっては見覚えのあるものばかりであろうが、会場に陳列されたのを見るのはまた趣が異なるのであろうか、熱心に鑑賞されておられた。「空穂周辺雑誌」では窪田家寄贈本中に「山比古」の揃いがあったことは、関係者の目をみはらせたし、中には先生にとっても初めてみた、とされる資料もあった。立命館大学より借用した「北光」、日本大学総合図書館より借用した「朝の光」など、参観者の中からも初めてとの声が多く、大変注目をあつめた。また、空穂門下の金光碧水氏はこの企画を知って会期中にご所蔵の『明闇』の原稿を「空穂文庫に」と章一郎先生宛にお送り下り、先生はまた、それを直ちに図書館へおとどけ下さって、会期途中から展示に加えられるということもあった。この「明



闇」の原稿は、書名が「暁露（アカトホヅユ）」とされており、はじめはその書名が「暁露」であったことが今回はじめて明らかになった。これは章一郎先生も「初めて知りました」といわれたことであった。

来場されたのは窪田家の方々、学内外の主に国文学関係の教員諸氏、歌壇の方々で、大勢の参観者を得た。特に、本年の「空穂会」がこの展覧会の期間にあわせて大隈会館で開催されたため当日は会員諸氏が大挙して来場され、熱気を含んだ会場となった。

出陳品は空穂の全歌集、全著作はもとより館蔵の三大評釈の原稿、短歌書幅、短冊、常に座右におかれたという小沢蘆庵、香川景樹の軸など、また妻藤野に宛てた結婚前の書簡、遺愛品の机、硯、それから肖像、油絵、胸像などとバラエティに富み、変化をもたせることができた。会場には、自作の朗詠のテープを流したので、お声を懐かしむ人も多かった。窪田家から提供のあった写真も随所にちりばめ、彩を添えることができたと自画自賛している。

会期後に

最初に述べた通り、この展覧会は窪田家より寄贈された資料を中心に催された。従って窪田先生には体調を崩しておられたにもかかわらず、当方の要望に懇切にお応え下さり、何度となく自宅の書庫内を捜索され、資料を出して戴くなどのご迷惑をおかけした。誠に頭の下がる思いだった。また、貴重なる所蔵資料を快く御提供下さった方々、他大学の図書館、これらの援助に対して、我々委員一同深く感謝の念を捧げたい。

子細にわたると欠陥がなかった訳ではない。開会してからもキャプションの訂正があちこちで出るなど反省すべき点はさまざまあった。しかし、全般的にみて、窪田先生並びに観覧者の方々からねぎらいの言葉を頂戴できたのは責務の一端は果たせたのであろうかと漸く安堵している。